

こしえるびと

つむぐストーリー vol.115

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

野菜作りを仕事に

強い日が差し込むハウスで、収穫を待つミニトマトの栽培管理作業に汗を流す今川てる子さん。てる子さんにとって農業は、母が家庭菜園で野菜や豆などを作る程度のものであった。それが5年前、地元企業を退職したのをきっかけに「野菜作りは仕事になるかも」と思い立ち、JAの新規栽培者向け指導会「園芸たよー全員集合」に参加した。栽培に使える畑はおよそ1㌥だが、小さい栽培面積でも収益を見込めるミニトマトを薦められ、庭の一部も畑に造成して栽培面積を確保。使用していないパイプハウスを譲り受けて移設してもらい、ミニトマト栽培をスタートさせた。

続けることが自信につながる

ミニトマト栽培をほぼ経験ゼロから

始めたてる子さんは、無我夢中で一人で栽培管理を行ってきた。その中で、

毎年いろいろなことに挑戦し、試行錯誤を繰り返している。昨年は、ミニトマト部会の若手生産者で取り組んでいる品種「サマー千果」の栽培に挑戦した。これまで栽培していた「サンチェリーピュアプラス」と比較して、樹勢の強弱や着花数、耐病性などの違いを実感した。5年目の今年は、土壌診断を実施したところ、土作りの重要性和大切さがよく分かった。土作りに力を入れることで、生育は順調だと感じている。ミニトマトの生育状況を観察することが大切だと気付き、「今までは自分の考えを押し付けていた」と振り返る。

「栽培を続けることが自信につながる」。今年も夏の暑さが心配されるが、誘引方法を工夫したり、遮光ネットを使用したりして、長期間の出荷を目指

している。

ミニトマトでみんなを笑顔に

自分が作ったミニトマトを「おいしい」と食べてもらえることがやりがいにつながっている。一番喜んでくれるのは孫たちで、「子どもの感覚には感心させられる」とてる子さん。「収益を上げることも大事だが、笑顔で応援してくれることがうれしい」と話す。

ミニトマト部会では地区の班長を務め、盛岡の市場視察にも参加し、消費地の状況を肌で感じる事ができた。消費者のことを思うと「出荷する時は細心の注意を払わなければ」と気を引き締める。

今後は、「種から育ててみたい」と育苗からの栽培を視野に入れている。周りの支えに感謝しながら、てるさんは歩み続ける。

ミニトマトでみんなを笑顔にしたい

大東町鳥海 今川てる子さん



PROFILE

今川 てる子さん (64)

Teruko Imakawa

大東町鳥海

1960年大東町生まれ。高校卒業後、関東の企業に就職。帰郷後、子育てをしながら地元企業の工場などに勤務し、退職後の2019年就農。ミニトマト1.7%。夫と母の3人暮らし。